

通史：半世紀のあゆみ

# 青春のパライストラ

第1期黄金時代

編集部

## 1. 関大は本物になった

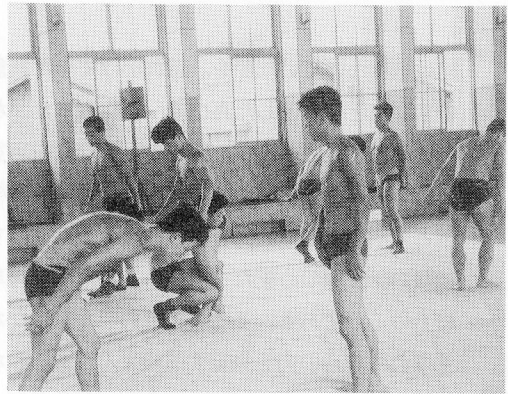
村田恒太郎は、昭和28年（1953）度迄の監督業をまっとうして、その年12月に東京に帰ることになった。村田はそのときのことを感慨を込めてこう描写している。

◇

さて、関大は本物になった。この頃、私は仕事の関係で東京に帰ることがきまった。そうして監督就任の順序を違えてしまったが、戦後の混乱期でもあったのでお許しを請うとして、前記の松井清氏にこの機に関西大学レスリング部の第2代目監督をお願い申し上げることになった。幾多の想い出を残しながら……私は東京へ去った。今なお、当時贈られた記念品の置き時計は時を刻み、関西大学レスリング部の足音が次代、次代へと堅実に時を刻んで行くように思われる。（村田）

◇

昭和24年には日本人を鼓舞して、雀躍させる吉報が海の彼方から届いた。その当時、いがぐり頭やおかつば頭の小学生は、ラジオの実況放送を真似て盛んに遊びを創造したものであった。「サンコース・ハズメ、ヨンコース・フルハシ…」



写真▷第1期黄金時代の練習風景

と子どもたちは校庭で町角で庭先で、水泳のスタート台に立つ真似事と、その実況放送の口真似に遊びを見いだしていたのである。昭和22年8月9日の全日本水上選手権大会。古橋広之進は400メートル自由形に4分38秒4の世界新記録を出した。廃墟の中を必死に明日に向かって生き抜く日本人にとって、希望であった。一億総懺悔したばかりの日本人にとって、大いに希望であった。少年少女にとって、自信であった。大人たちにとっても、自信であった。人々は「希望」と「自信」に飢えていたのである。古橋の好敵手が橋爪四郎

だった。古橋と橋爪はつぎつぎと世界記録を塗り変えた。巷では、その記録までも子どもたちが誦んじて実況放送物真似遊びに興じながら「イッチャーク：フルハシ……」と大声ではしゃぎながら子ども自身の「夢」を膨らませていたのである。

昭和24年8月17日ロサンゼルスで開催された全米水上選手権大会で、1500, 800, 400メートル自由形に世界新記録を樹立した。「吉報」は、それだった。1500メートル、18分19秒。驚異的な世界新記録だった。「フジヤマのトビウオ」と外電が世界に伝えた。この快挙に、日本じゅうが沸き返った。人々は、古橋の姿に、敗戦から立ち上がる「希望」を重ね合わせて見たのである。当時の新聞の「声」欄が伝えている。

私は忘れかけていた夢を、忘れかけていた興奮のなかにとりもどした喜びで一杯になった。われわれは忘れ去っていた民族の正しい力を自覚してしみじみと皮膚に感じたのであった。古橋君とて学生である。毎日の生活はそう楽なはずはない。食糧の心配だってあろうし、満員電車にももののである。そこにわれわれがなにかかくされた自らの力を発見するゆえんがある。われわれは一人一人古橋君にならねばならない。  
(一部略・昭和22年8月13日付「朝日新聞」)

この頃人々は、古橋の、一挙一動に「生きる力」を刺激されていたのである。昭和23年に結集した関大健児もまた、古橋と、同じ心意気であったに相違ない。いわんや「零」から、この時代に、「青春のパライストラ」を作った関大健児である。古橋を、意識していたに相違ない。復員してきて関西大学の庭に、「青春のパライストラ」を築いた村田恒太郎の心意気もまた、だからこそ5年の歳月を経て東京に去らざるをえなかったときに、「さて、関大は本物になった」と言わしめたほどに、

燃焼しつくすまで自己を捧げたのであろう。心意気と心意気とが融合して、核反応して、本物を生み出したのである。

輝かしい初陣は、1回目のリーグ戦、すなわち春季リーグ戦においてであった。「関大⑧-1同大」「関大⑤-4関学」と2勝を挙げて優勝を飾っている。その前年まで加盟していた大阪機械工専は、事情があって既に脱退していた。そのリーグ戦に出場できることになった喜びの声を聴いておきたい。木村勝の述懐である。

リーグ戦に出場できるメンバーの名を各クラスにわたって提出できるようになったときの喜びは、当時のマネージャーとして忘れることのできない大きな喜びの思い出でありました。こうした苦しいなかに、新しいものを生み出す喜びは、私の今日までの仕事に、また生活に大きく人生経験の一端として活用させて頂いております。(「30周年記念誌」)

加えて、木村は経験を語る。「私は、ひとつの共通したものを通じて、それぞれの目的に向かって、社会に貢献しうる人間づくりが働いたからこそ、私自身レスリング部に籍をおくことによって今日の私があるように思われます」と。関大健児の心意気が炸裂して、火花を散らして、そして一つの粘性を帯びた実体に生まれ変わって、一人ひとりの人格に止揚したのである。村田恒太郎は、その過程に出会った一人ひとりに感謝しながら、「関西大学レスリング部が限りなく前進することを祈って創生期の報告」を閉じている。

## 2. 主将が語る

昭和23年に創部した関大レスリング部は、その年の関西選手権大会に初出場して、安川がフライ

級で第3位に入賞し、関大躍進が始まることになる。関西学生レスリング連盟のリーグ戦が始まった昭和22年度春季リーグ戦から、村田恒太郎監督が引退する昭和28年度末迄の各大学の戦績はつぎのとおりである。

- 関学 ⇒ 春季優勝4回・春季2位3回・秋季優勝6回・秋季2位1回（昭和22年から出場）
- 同大 ⇒ 春季2位2回・春季3位5回（昭和22年から出場）
- 大工 ⇒ 春季3位2回・秋季2位1回・秋季3位1回（昭和22年から出場、昭和24年脱退、「大工」は大阪機械工専の略）
- 関大 ⇒ 春季優勝3回・春季2位2回・秋季優勝1回・秋季2位4回（昭和24年から出場）

ちなみに関大は、昭和24年の春、昭和25年の春、昭和27年の秋、昭和28年の春に優勝している。その草創期をして「第1期黄金時代」を築いたのである。その草創期を主将として束ねた下村正三（現・木村正三）は、当時の「パライストラ」体験を次のように述懐している。

- ▷ 食糧事情・経済状況も悪く、アルバイトと両立させながらの練習だった。
- ▷ 仲間と、一枚のお好み焼きを何等分かにして食べたものだ。
- ▷ マットはトラックなどに使用されていた雨よけ用のいわゆる「帆布」だった。
- ▷ 村田監督の猛練習に耐えしのんだ。
- ▷ とにかく合宿がみんなを鍛えてくれた。
- ▷ 当時は、先に発足した関学か、後発の関大か、いずれに進学するのか迷った「入学希望者」は多かったはずだ。



写真▷村田さんと下村さんの練習場面  
（昭和24年7月5日『スポーツ日本』紙より）

### 3. 昭和23年（1948）・部の創設

風俗・流行・歌 アプレゲール／アロハ  
シャツ／♪『異国の丘』

この年、関西大学レスリング部は、創設された。立役者は、宇賀（昭夫）、古沢（1990年没）、安川（1975年没）、友田、東條（1995年没）、田中、木村（勝）、青島などに加わるに、村田監督招聘の道筋を作った山本雅之（1979年没）であった。

当時、日本大学大阪機械工専の下村や、大阪市立高校の押立・木村（晴茂）・黒木などが関西レスリング界では既に活躍していた。そして彼らが、関西大学に、入学することになる。

この年、安川は関西選手権で第3位となり、新人安川の健闘は見るべきものがあり今後が期待される、と早くも囑望されている。そこに、翌24年、前述の下村・押立らのレスリング経験者が入学することになる。押立は入学の前年の12月に開催された全日本選手権大会で、フライ級の優勝候補随

一の早稲田の荒井を破る殊勲をみせて、「称賛ジュニア押立の健闘」と日本レスリング史に記録されている逸材である。関大が一気に「第1次黄金期」を築き上げる機運は既に昭和23年に約束されていたというわけである。

この年の11月、「極東国際軍事裁判の判決」があって、東条英機ら7名に絞首刑が宣告され、世の中には暗い空気が漂っていた。だが関大健児たちは、立ち上がったのである。

#### 4. 昭和24年(1949)・初優勝

風俗・流行・歌 お年玉つき年賀はがき  
初登場/駅弁大学/♪『青い山脈』

昭和24年の加盟と同時に、関大は、輝かしい初陣を飾ることになる。当時の関学の主将が『デイリースポーツ』の取材で抱負を語っている。

今年はメンバーも一新し変動が大きかっただけに私に課せられた責任は重大です。不敗を誇る関学の伝統を保持し、今年こそ打倒関東の大願を達成すべく努力して行きたい。

意気込むその関学を初陣の関大が破って優勝を飾ったのである。その模様を『関西大学新聞』が称賛して伝えている。

関西大学リーグに初出場戦後6連覇を誇る関学を5対4の接戦で破り初優勝の栄冠を獲得し、全日本レスリング界に関西に関大ありと認められるに至った。(全文は、「青春のパライストラ1949」欄に掲載)

こうして学内評価も一気に高まって、関大レスリング部の地歩が固まったのである。昭和24年は監督の村田が結婚した年でもある。感慨深いものがあったろう。昭和21年に上海から鹿児島に復員してきた村田は、直ぐ上京して、家族が長野市に疎開中のため、友人宅を転々とする生活を始める。そして明治大学レスリング部の復活に情熱を燃やすのだが、1年半続いたそんな生活で、「自立」などとの人並みの悩みに悶々としていた。幸い23年に大阪に職を得て中学教諭としての生活が始まる。そして、そこでも、レスリングと切り離せない生活が始まることになる。「大阪市立中のコーチ、関西大学のレスリング部を創設し、初代監督となる。大阪協会の設立、近畿協会の創設等に関わる生活が5年間続くのである」(村田自著『俺』)。

そんな村田だから、レスリングに打ち込むすべては熱い。その情熱に応えた若者がいた。関大健児である。この年映画『青い山脈』が大ヒットして巷にその主題歌が流れた。明日に希望をつなげる軽快なリズムだった。村田も関大健児たちも、その歌詞を口ずさんだ昭和24年であったろう。



写真▷こんな練習をしていました

## 5. 昭和25年（1950）・伝統の関関戦

風俗・流行・歌 アルサロ／言葉「とんでもハッポン」／♪『買い物ブギ』

昨秋は関学に惜しくも1点差で負けて2位だった。関学の監督は井川豊であった。井川の指導理念が前出『デイリースポーツ』に残っている。

うちのモットーは学生スポーツマンらしく美しく戦い必ず勝つということです。学生としての本分を忘れ、ただ勝負のためにのみ練習することは最も排斥すべきことです。私は教養に満ちた責任感の強い明朗なチームカラーを作り上げるべく努力しています。私も部員もレスリングとともに苦難に満ちた人生の幾山河を越えて行く決心です。

ここに伝統の「関関戦」が始まることになる。25年の春、関大は、再び王座を奪回した。だがこの春は、関大のポイントゲッター安川が右肩骨折で、ドクターストップの状態であった。安川の試合出場の如何が勝敗を分ける。安川は自ら出場を申し出た。そして安川の勝利で関大は優勝を手に入れたのであった。その安川の健闘振りは『関西大学百年史』にも記録されている。

25年春の関西学生リーグ戦も優勝したが、優勝を決める関学戦で、安川健次は練習で右肩骨折をしながら出場、左腕一本で勝ち優勝に導いた。

この引用は、新制大学時代になってから再出版した終戦直後の「関大スポーツ」の復活振りを紹介する欄に記された「レスリング」の項からのものである。この安川「レスリング」が関大の伝統

を作ったことは間違いない。

戦後第1回の日米対抗戦が甲子園でこの年7月に行われた。日本の代表に、フライ級の押立、フェザー級の村田監督、ライト級の下村が選抜されている。村田は、この大会を最後に現役生活に終止符を打った。しかし関大レスリング部に対しては相変わらず調子を落とさず猛練習を続けた。その年の全日本選手権大会では、フライ級の押立が第3位に入賞し、ライト級の下村が5位になっている。いよいよ関大は、注目されることになった。

宇賀照夫（昭和28年卒）が当時の模様を語っている。「関西大学レスリング部は、このように発足3年目にして、早くもその意気軒昂ぶりを発揮するという幸運に恵まれたのであるが、これは、ひとえに村田監督をはじめ創部当時のみなさんの研鑽努力の賜物だと思う」と。当事者として浮かれない、冷静な観察眼ではある。

## 6. 昭和26年（1951）・関学に苦杯

風俗・流行・歌 GIカット／社用族・三等重役／♪『上海帰りのリル』

「関西大学学報」によれば、この春のリーグ戦に対しての下馬評では、「バンタム級に押立、ライト級の下村が健在であり、フライ級に安川あり……戦績が期待されている」。ところが、昨年度の秋に引き続いて、この春は関学に負けてしまった。「関学⑥-3関大」の対戦成績であった。さらにこの年の秋もまた苦敗を喫することとなった。対戦成績は春と同じ「関学⑥-3関大」であった。しかしこの年の個人戦は順調であった。関西選手権大会ではフライ級の押立が優勝し、全日本の選手権大会ではライト級の下村が第3位に入賞

している。また全日本学生選手権大会では、フライ級の押立が第3位、ライト級の下村が第2位と活躍している。

## 7. 昭和27年(1952)・ヘルシンキ五輪

風俗・流行・歌 NHK『君の名は』／  
言葉「エッチ」／♪『芸者ワルツ』

春季リーグ戦、まだ関大の不振が続く。「関学⑤-4関大」と負けて、4連敗を喫してしまった。この年は、雪辱を期して、「枚岡旧青年会館」で打倒関学を目標にいままでにない緻密な合宿を行っている。15日間にわたる長期合宿でもあった。キーワードは「考えるレスリング」である。当時の押立主将がその模様を綴っている（「青春のパライストラ1952」を参照）。

当時から「考えるレスリング」が我が部の目標の一つであった。ロードワークも、市電レールの上をジグザクに走り、時には「バック・ターン・それタックルだ」と走りながらシャドウレスリングに夢中になったものだ。

合宿中は前方の一本松が何本にも見えるという「死の特訓」のクロスカントリーをこなした。春にはその効果がまだ現れなかったが、秋には手応えが見えてきた。秋季リーグは、関学の連勝をストップすべく全力で闘った。「関大⑦-2同大」「関大⑥-3関学」の結果だった。5シーズン振りに王座に帰り咲いたのである。この自主性こそが、関大の伝統でもある。

この合宿の成果が実って、個人戦は、関大勢が大活躍している。関西選手権大会では、フライ級の安川が優勝、バンタム級の押立が優勝、ライト

級の清谷(兄)が第2位、ウェルター級の清谷(弟)が優勝、ミドル級の梶原(OB)が優勝、同じくミドル級で古沢が第2位であった。全日本学生選手権大会には惜しくも押立が明治の橋本に敗れて第2位であった。

この年は、ヘルシンキ五輪の年だった。日本スポーツ界の悲願が結実して、国際社会への復帰を、スポーツが先駆けてものにしたのである。しかも「レスリング」が戦後初参加のオリンピックで唯一の金メダルを獲得して、内外に、認知されることになったのである。この金メダルはもちろんのこと日本レスリングにとっても、「第1号」であった。ヘルシンキ五輪には、5名の選手が参加している。すなわちフライ級の北野(2位)、バンタム級の石井(優勝)、フェザー級の富永(5位)、ライト級の霜鳥(6位)、ウェルター級の山崎(5位)である。結果は全員入賞の好成績であった。一躍「日本レスリング」の名声が高まり、国内における認識も新たになって、当時の学生レスリング界においても、「続け!」の機運が高まることとなる。前評判ではレスリングはあまり期待されていなかった。ところが同様の体操とともに、結果としてはその2種目が大活躍であった。ここに「レスリング・ニッポン」が誕生することになる。



写真▷戦後五輪最初の金メダルに輝く石井さん

## 8. 昭和28年(1953)・村田監督勇退

風俗・流行・歌 街頭テレビ・赤電話登  
場／八頭身美人／♪『雪の降る町を』

この年「昭和28年」は、村田の、最後の年である。昭和28年12月、東京で株式会社三友製作所を設立することになって、監督を退くことになる。

この春のリーグ戦は、連覇を目指して、「関大、関学は伯仲」の予想を吹っ飛ばし王座を不動にする意気に燃えていた。当時の予想記事がある。

(関学では)今秋は全日本学生で活躍した川崎(フライ級)また清水(フライ級)、山田(フェザー級)らが最近めざましく実力向上を示しているから、対関大戦でもフライ級で先勝出来れば、試合は関学に幸いなものになるのではないか。(記事の全容は「青春のパライストラ1953」所収)。

この予想のとおり、フライ級で1勝をものにした関学が、その勢いで乗り切ってしまった。「関学⑥-3関大」の結果で関大の連覇はならなかったのである。村田監督の最後を飾ることはできなかった。村田は一端その年の暮れに急遽東京に引き上げた。理由は前述のとおりである。明るる年3月、その村田の送別会が、大阪の道頓堀の「いろは」で盛大に開催された。村田は、その5年間を、次のように表現している。

初代監督としての私の青春も関大レスリング部とともに歩んできたというこの強い印象は、終生忘れるものではありません。関西大学、それは心の母校と言えるものです。……今尚、当時贈られた記念品の置き時計は時を刻み、関西大

学レスリング部の足音が次代、次代へと堅実に時を刻んでいくように思われます(「30周年記念誌」)。

第1期黄金時代の基礎固めは終わった。そして第2代目監督の時代となる。松井清が、村田の跡目を継いで、監督に就任することになる。そして第1期黄金時代の仕上げにとりかかる。

## 9. 昭和29年(1954)・松井監督発進

風俗・流行・歌 東宝映画「ゴジラ」/  
力道山(プロレス)／♪『お富さん』

「30周年記念誌」では「発展期の回顧」と題して松井清が次のように書き出している。

◇

29年5月にはアジア大会(マニラ)と世界選手権大会が東京で行われました。アジア大会では完全優勝を逸し7階級の内6階級優勝、2位1階級と実に惜しい結果でした。世界選手権大会では優勝1階級(笹原正三・フェザー級)、2位1階級、3位2階級、それに5位、6位各々1階級であり、



写真▷「米国遠征」の押立さんと清谷さん  
(押立=最前列中央・清谷=最前列右端)

その時のソ連が3階級優勝、トルコが2階級優勝、イランが1階級優勝ということで、これら最強国に日本が列して名声を博しました。(松井)

◇

手元の大修館『近代体育スポーツ年表』の昭和29年12月25日の欄に、「外務省、明春ソ連に行く日本レスリング選手団に旅券下付を内諾、訪ソ一般旅券の最初の例」と記されている。その前年日本レスリングはトルコへ初遠征を果たしている。これは当時の八田会長の戦略でもあった。海外に視点を置き、そして、若者の眼を向けさせる。普及と強化の秘策であった。

◇

3月5日に創部以来初めてのアメリカ遠征日本代表の一員に押立(OB)と清谷(兄)主将の2名が選ばれ神戸出帆のクリーブランド号で遠征の途につきました。アメリカ各地転戦の後全米選手権大会に出場グレコローマン・フライ級において押立が2位という立派な成績をあげてくれました。このグレコローマンのメダル受賞は日本のグレコ史で国際大会での第1号であります。(松井)

◇

この引用のとおり、関西大学レスリング部は、創部の初陣で関西学生レスリングリーグ戦で優勝するという離れ業をやったのけたうえに、早くも海外でも活躍組を続々と輩出することになる。その賛辞が『関西大学百年史』に歴然と記されている。この頃の関大レスリング部は、その学内での名声を不動のものにしつつあったのである。

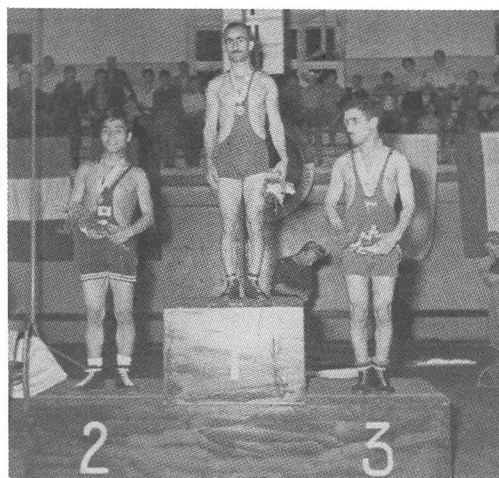
……一方、海外遠征でも活躍した。29年3月アメリカ遠征日本代表に押立(OB)と清谷利次が選ばれ、押立は全米選手権でグレコローマン・フライ級で2位の成績をあげた。十一月の日本選手権では横山勝利がフライ級2位となって注目されたが、30年2月のアメリカ遠征に横山

と清谷利美が日本代表に選ばれ、全米選手権で横山はフリー、グレコともに優勝し、清谷はグレコ・ライト級2位となり、関大レスリングの名を高めた。清谷は兄弟ともに遠征に選ばれたのである。横山は8月、ポーランド・ワルシャワで開かれたユニバシアードの日本代表にも選ばれ、フライ級決勝戦で惜敗、2位になった。

この海外での快進撃は、戦後の関西大学スポーツ史を彩る画期的なものだった。「海外に、眼を向ける」の日本レスリング政策に関大健児たちが応えたのである。さてこの春のリーグ戦はまたもや関学に負けている。そして秋に臨むことになる。

◇

8月1日から9日まで鳥取において夏の合宿を行い秋のリーグ戦に備えて練習をみっちり行いました。9月19日大阪YMCA体育館において秋季リーグ戦があり、関大⑥-2同大、関大⑧-1近大、関大⑤-4関学で、監督となって初優勝を味わいました。昭和24年に初めてリーグに加盟して以来5度目の優勝で、この喜びをこれから絶対に他校に渡さぬように覚悟をきめて練習に励むことを部員一同に申し渡しました。(松井)



写真▷ユニバシアード銀メダルの横山さん



## 10. 昭和30年(1955)・横山手記

風俗・流行・歌 家庭電化時代「三種の神器」／マンボブーム／♪『この世の花』

この年は、横山主将が度重なる海外遠征のために、後半の主将を坂副将が引き受ける異例の処置を行なった。6月4日春季リーグ戦が始まる。このリーグ戦から、新たに名城大が加わって、関大、関学、同大、近大、名城大、八幡大の6校リーグとなり、西日本の大学レスリングも隆盛の一途を辿ることとなった。その前年、八幡大が加盟したおりに、「リーグ名」を西日本学生レスリング連盟に変更している。関大はこの春を全勝で優勝している。秋のリーグ戦は、10月2日より、大阪YMCAで始まった。関大はこの秋も全勝で優勝し3連覇を成し遂げている。監督の松井清は「この分なら当分の間連勝することができる見込みがたった」とその年の好調ぶりを述懐している。前出の引用にある横山「ユニバシアード」遠征に触れておきたい。松井所見を引用しておく。

◇

8月5日、ポーランドのワルシャワで開催されました国際青年スポーツ大会に、日本から初めて参加することになりました。日本代表として、織田幹夫団長以下陸上競技4名、レスリング5名、体操2名、卓球2名が参加し、レスリングに関大より横山選手が選抜されて参加しました。横山はフライ級に出場、決勝戦でソ連のツアルカラ・マユーデにラスト30秒前まで優勢に試合を進めており、そのまま優勝を成すかと思われましたが、余りにも勢いに乗りすぎゴング寸前捨て身の「かわず投げ」にかかり惜しくも2位に甘んじました。

(松井)

横山は日本のスポーツ選手として初めて、中国

經由ソ連からポーランド入りしている。その横山がサンケイスポーツに送った興味深い手記がある。貴重なスポーツ事情資料でもある。

◇

## 北京の暑さには参る

▷…北京の暑いことには全く驚いた。裸で寝ても汗が身体から吹き出すほど。風間君などは、夜中に「オーイ助けてくれ、暑くてたまらん」と、悲鳴をあげるしまつ。朝4時半に起床して涼しいうちに練習に行くことになったのだが、笹原さんと桂本君が見つからない。ほうぼうを探したら、屋上の青空の下で毛布にくるまってぐっすり寝ていた。練習を行った中央体育学院は、2年制の体育指導者養成機関で、学生は寄宿舎生活をしている。設備もよく、立派な体育館もあった。この学院長の話では中国の青少年は平均してまだまだ体力がよいとはいえないので、スポーツで鍛えてゆくとのこと。また現在中国で盛んに行われているスポーツはバスケットボールだそうだ。

## 全ソ農業博を見学

▷…27日に団長はじめ役員の方が到着、4日間汽車に乗りつづけて暑さのために死ぬ思いだったと言っておられた。正午発の飛行機は砂漠の地方の天候が悪く中止、翌28日午前6時モスクワに向かって飛び立った。沙音山達、伊刺庫次克、新西伯利亜とつぎつぎ経て、砂漠や原始林をとび越えて午後2時頃モスクワについた。出迎いのバスでモスクワホテルに、そして宿泊、食堂で世界母親大会参加のお母さん達に会った。食後は全ソ農業大博覧会を見学。翌30日午後4時頃ワルシャワに到着した。

## いよいよワルシャワ

▷…花束を持った出迎いの青年達や新聞記者、ニュースカメラマンに囲まれて握手攻めに会う。空港には各国国旗が飾られ、市街中の家々には旗が立てられ美しく飾りつけが来ている。こわれ

たレンガ造りの家が痛ましく戦災の跡を残しているが、ポーランド人はみんな明るく楽しそうだ。宿舎へ走るバスへはときどき通行人が立ち止まり手を振っていく。僕たちも大きく手を振り返す。宿舎は大学の寄宿舎でエジプト、朝鮮、インドと日本が同宿。

#### エジプト選手と練習

▷…レスリングは試合が3日から始まると聞き1日からだと思っていたのが3日間の余裕が出来て大変ありがたかった。エジプトのレスラー達と一緒に練習した。彼等はわれわれとちがいで、グレコローマン(下半身は使えない)の選手だが、フリースタイルにも出るという。練習を見ていて身体の柔軟なことと首の強いのは驚いた。相手を自分の体の上のせてあおむけに倒れ、首で支えてフォールする。軽い練習後、計量をしてバスで宿舎に帰る。大会中ワルシャワは各国から集まった人びとで人口が膨れ上がり、交通も大混雑で、3輛連結の細長い小さな電車の入口にまで乗客がぶらさがっている。バスや電車が走行中、停留所でない所から走って来て飛び乗りをやるのには驚かされた。運転手の方もとび乗り歓迎とみえて、どの電車も乗車口は全然しめなくて開けたままだがわれわれからみると非常に危険で気になってしょうがない。

#### すごいザトベック熱

▷…8月1日午後4時から新しく作られたセントラルスタジアムで開会式がありスポーツ行進が行われた。各国より抜き選手が集まっているのだろう。百名を越える大人数の国が多かった。日本代表選手は18名の少人数だが堂々とグラウンドを歩いた。チェコのザトベックの人気はものすごく、場内から「ザトベック、ザトベック」と合唱がわきあがった。試合は3日に開始、最強国トルコの不参加は残念だったが、ソ連、イラン、ブルガリア等14カ国69名の強豪が集まり文字どおりの激戦

だった。

#### 全員入賞の大活躍

▷…日本は笹原さんがどの選手も問題にせず優勝、僕がソ連に負けて2位、風間君が3位。兼子さんは決勝リーグで3者同率になり、ポーランドが兼子さんに判定で負け、ソ連にフォール勝ちして優勝したので、兼子さんはポーランドに勝ちながら3位になってしまった。桂本君も、優勝したザンディ(イラン、1954年東京の世界選手権者)をフォールしたのだが、翌日判定で敗れてしまい、5位に止まった。結局、金メダル1、銀1、銅2の成績で全員が入賞した。(横山)



記事内容から当時の日本はグレコローマン型レスリングに不慣れであったことが窺える。グレコ特有の「そり投げ」系統の技術を、横山の表現では、「相手を自分の体の上のせてあおむけに倒れ、首で支えてフォールする」と驚きの目で捉えている。

### 11. 昭和31年(1956)・5連覇

風俗・流行・歌 太陽族・神武景気／ロ  
ックンロール／♪『愛ちゃんは嫁に』

この年が第1期黄金時代の完成年であった。春秋のリーグ戦を連覇して5連勝を飾ったのである。「夏の合宿は、京都東山の山紫水明の永観堂で行いました。朝な夕なの読経の声が聞こえる静寂な環境での合宿、このような合宿は初めてで、当時の選手は『動と静』で心技体を修練できたことと思います」と松井監督が記している。その合宿の成果が第1期黄金時代を作ったのである。当時の関学は、「打倒関大」を目指しての好チームだった。「その間の5連勝は大変な苦勞をとまな

いましたが、それぞれに携わった選手の自覚がそれを成さしめたのです」と松井監督が当時を振り返っている。

1956年はメルボルン五輪の年である。このオリンピックに向けて、日本協会は、度重なる海外遠征を企画して強化策を練っていた。その経緯を松井記述が「30周年記念誌」で的確に捉えている。

◇

昨年世界の最強のトルコ・チームとの交歓試合に6戦中4勝2分と好成績をあげた日本レスリング協会に対して、イランのパーレビ国王より招待状がとどきました。イランはレスリングが国技で、国王が会長を務めるほどの熱の入れようであります。おそらくイランとしても、メルボルン五輪の年であり、日本と対戦しその実力を試したかったのでありましょう。日本としても強国の一つであるイランの偵察もあり、喜んでこの招待を受けました。イラン遠征日本代表レスリングチーム副団長に小生（松井清）が選抜されました。2月4日一行11名がイラン大使の招待パーティを東京帝国ホテルでうけ、同日6時より日本レスリング協会主催の壮行会に出席し同夜11時羽田発のインド航空で出発しました。首都テヘランで第1、2戦、アバンダンで第3、4戦を行い1勝3敗の成績に終わりました。早くからイラン側は強化合宿でこの交歓試合に臨んでおり、また観衆も認めるような審判の不公平などがあって、思うような成績をあげませんでした。実際には5分の勝負で、実力的に差のないことが十分判りました。この結果メルボルン五輪の対策が十分たつとともに、全階級入賞の自信を深め、2～3個の金メダルの予測もたてることができました。（松井）

◇

松井清を副団長とする一行は、このイラン遠征中、パーレビ国王の謁見の榮譽の機会を得ている。松井清は、同年3月12日、産経会館で「メルボルン

ンへの抱負」と題してこのイラン遠征での見通しをおりまぜて講演を行っている。産経新聞社の主催による講演会であったが、多分に、パーレビ国王の話題も語られたことであろう。さてメルボルン五輪では、松井「抱負」にあるとおり、日本は、一躍世界の最強国に躍り出る手柄を立てたのである。その模様を『日本スポーツ百年』（日本体育協会編）が次のように記録している。

昭和31年の第16回メルボルン・オリンピック大会では、八田会長自ら監督となり8名のフルメンバーで参加、8種目中6種目に入賞という成果を結んだ。各選手とも各国の強豪に伍して健闘、飯塚選手の不慮の負傷にもかかわらず、笹原、池田が、フェザー、ウェルターの両階級に優勝、笠原がライト級第2位で金銀メダルを獲得、他の代表も入賞の好成績を得て、従来の軽量級から中重量級にまで進出、トルコ、ソ連に次いでレスリング日本の名を前回にもましてオリンピック史上に高めたのである。

この大会時の総会で、八田会長が、国際連盟（FILA）の副会長に選出されるのだが、いよいよ日本が、国際レスリング界に、躍り出てその真価を認められることになったのである。



写真▷パーレビ国王に謁見の松井さんたち一行  
（松井=右から3人目・兼坂名誉会員=右端）

## 12. 昭和32年(1957)・グレコ登場

風俗・流行・歌 才女時代・よろめき/  
ロカビリー旋風/♪『錆びたナイフ』

この年多くのポイントゲッターを卒業で送りだしている。春は、6シーズン振りに「関学⑥-3 関大」のスコアで後塵を拝することとなった。しかし、秋には底力を見せて、「関大⑤-4 関学」と雪辱を果している。この一年の概観を「30周年記念誌」の松井手記から引いておく。

◇

8月8日、アメリカ・レスリングチームが、ロバート監督以下7名の選手で来日、日米対抗レスリング大会を大阪府立体育館で行いました。日本代表チームには、コーチに小生(松井清)、選手としてライト級に乾が出場しました。11月、全日本選手権大会が大阪アベノ体育館で開催され、地元ということで、フリースタイルには、小中、三好、瀬脇、神谷、西脇、山本、木田、乾、丸谷、森川と大挙して出場しました。今大会より日本で初めてグレコローマンスタイルが採り入れられ第1回選手権大会となり、前記選手がこれにも出場して、フライ級に小中(現・柏木)、ウェルター級に乾がそれぞれ第2位と健闘し、「関大ここにあり」と大いに気をはきました。(松井)

◇

この大会のグレコで、関西勢が大活躍した。関学の植木がフェザー級で優勝し、関大勢も松井手記にあるとおりの活躍を見せている。これを契機に、特に関大では、グレコローマンレスリングの研究が進んで、後年の市口「東京五輪ゴールドメダル」につながる下地が整うことになる。さてこのグレコローマンスタイルの採用には次の教訓が影響してのことである。同じく前出の『日本スポー

ツ百年』から引用しておく。

メルボルン・オリンピックで日本選手をなやましたのはグレコローマン型の本場のトルコやイランの寝技の決定力と変化技であった。今後は日本選手もグレコローマン型を完全に身につけて日本独特の柔道、相撲、合気道を積極的にとり入れるということが強くさげばれてグレコローマン型の日本選手権も32年から開始された。

いよいよグレコローマンも始まって、日本レスリングはフル回転のトップギアで走り出すことになる。関大も、しかりである。

## 13. 昭和33年(1958)・松井監督勇退

風俗・流行・歌 即席ラーメン登場/フ  
ラフープ/♪『有楽町で逢いましょう』

この年をもって松井清は監督を勇退する。「30周年記念誌」から松井手記をそのまま引いておくことにする。



写真▷「米国遠征」の乾さん  
(乾=中央・右端=米国在住の清谷利美さん)

◇

3月11日、この年のアメリカ遠征日本代表レスリングチームに、乾主将が選抜されて出発。八田一朗会長を団長として16名の選手が、全米選手権大会その他の転戦試合を行う。転戦試合では7勝7敗1分と重量級の強い米国でよく乾は健闘しました。4月19日、昭和32年度の関西ランキングが発表され、関大勢ではフライ級小中1位、バンタム級西脇2位、同神谷5位、ライト級丸谷3位、ウェルター級乾1位、同森川2位でありました。5月春のリーグ戦には、関大⑤-3近大、関大⑤-4同大、関大3-⑤関学となり、前年に引き続いてポイントゲッターを多く送りだして、予想の通り、苦戦の結果2位に甘んじました。10月秋のリーグ戦にも、関大⑧-3同大、関大⑨-0近大、関大3-⑤関学となり、春に続いて2位となる。おそらく明年度も多くのポイントゲッターをかかえた関学の全盛であろうかと思うが、何とか今春

入部した新人より傑出した選手が出ることを祈って涙をのんだ次第であります。(松井)

◇

この年の新人は大量に入部している。市口や福家など12名である。8月の恒例の合宿は淡路島洲本で行われた。このところの苦杯を跳ね返すために捲土重来を期して緻密なスケジュールで、体力強化重点方式のメニューを組んでいる。「新入部員には技術よりもまず体力をつけるために、合宿中はトレーニングに重点をおき、『体力向上』に務めました。おそらくこの合宿ほどトレーニングをやったことはなく、部員一同『殺人的トレーニング』に悲鳴をあげたのではないと思われる」と松井手記は記録している。

関大健児は耐えた。そしてものにした。この合宿の成果が、まもなく、第2期黄金時代への足掛かりとして結実するのである。

(完)



写真▷関西大学「創立70周年」記念式典

創立70周年式典は昭和30年11月4日新成の大講堂で行われた。来賓には、文部大臣松村謙三、駐日フランス大使ダニエル・レヴィ、大阪府知事赤間文三、校友総代第1回卒業生元貴族議員内田重成、その他多数の名士が出席した。88歳の老翁内田の挨拶は本学の年輪と重味を語るものであった。明治28年入学の理事長白川朋吉83歳もまたしかり。記念事業として学術文集・各学部別4冊、「関西大学70年史」「同小史」等の刊行、学術記念講演等が行われた。(『関西大学百年のあゆみ』より・写真は祝辞を述べる松村文相)